N-BLOOD

NISMO Motorsports
Communication Magazine

NISMO Motorsports Communication Magazine **N-BLOOD** 2021 / FEBRUARY No.**89** NISSAN MOTORSPORTS INTERNATIONAL CO.,LTD

SAMPLE

N-BLOOD

NISMO Motorsports Communication Magazine
2021 / February
No.**89**

nismo

Produced by NISSAN MOTORSPORTS INTERNATIONAL CO.,LTD

N-BLOOD | No.89
NISMO Motorsports Communication Magazine

不屈の男の面目躍如

ポイントランキングトップだが、2位とは僅差で迎えた最終戦、富士
56号車 リアライズ 日産自動車大学校 GT-Rとチャンピオンを争う65号車は
オープニングラップから息をもつかせぬ接近戦を繰り広げていた
2周目の1コーナー目がけて藤波清斗がアウトから並びかける
前に出なければ勝機をつかむことはできないのだ
予定よりも多くの周回をこなし、ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラに最後のバトンを託した

SAMPLE

4 2020 SUPER GT SERIES GT500 CLASS
挑戦は終わらない
異例の1年を戦い抜いて

8 INTERVIEW : NISMO Executive Adviser
ミハエル・クルム
選手やチームを陰で支える仕事

10 2020 SUPER GT SERIES RESULT & RANKING
GT500/GT300 リザルト&ランキング

12 2020 SUPER GT SERIES GT300 CLASS
念願のチャンピオン獲得!!
KONDO Racing 2020年シーズンの軌跡

14 SUPER GT GT300 CLASS CHAMPION INTERVIEW
藤波清斗
ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ

18 2020 SUPER GT SERIES-GT500 / GT300
日産／ニスモとともに戦うチームの
ガレージを訪ねて―KONDO Racing

20 2020 SUPER TAIKYU SERIES
最終戦、無念の中止
日産車陣営は不完全燃焼の1年に

22 FOMULA E CHAMPIONSHIP
インタビュー：セバスチャン・ブエミ

26 PRIVATE CARS
愛車拝見！ レーシングドライバーのプライベートカー

28 NISMO RESTORED CAR
後世へスカイラインGT-Rを繋ぐ――
新たな取り組みがスタート

32 Club NISMO EVENT REPORT
初の試み！
Club NISMOオンラインミーティング

34 MOTORSPORTS
PADDOCK TOPICS

36 NISMO PRODUCTS
NISMOパーツ最新情報

38 NISSAN/NISMO COLLABORATION GOODS
カルソニック ニッサン R89C/STP タイサン GT-R
NISSAN/NISMOコラボTシャツ、ZIPPO NISMO

39 PRESENT
読者プレゼント

SAMPLE

2020 SUPER GT SERIES GT500 CLASS

挑戦は終わらない

異例の1年を戦い抜いて

**変則的なシーズンとなった2020年のSUPER GTシリーズ
NISSAN GT-R NISMO GT500は2勝を挙げたが、完全燃焼にはほど遠い1年となった
日産系チームをまとめる松村基宏総監督に、シーズンを振り返っての総評を聞いた**

Photo by Yasuhiro Oshima, NISMO

好不調の差が大きく出てしまった2020年シーズン

4台のNISSAN GT-R NISMO GT500は、23号車MOTUL AUTECH GT-Rのランキング6位を最上位として2020年シーズンを戦い抜いた。20年型のGT-Rは新規定により失ったダウンフォースを取り戻すことを念頭に開発が進められてきたが、新型コロナウイルス感染症の影響で開催カレンダーが再編されたことなどもあり、必ずしも順風満帆のスタートを切ったとは言えなかった。

しかし第3戦鈴鹿での勝利、第6戦鈴鹿の1-2フィニッシュなど、中盤戦以降は各車が光る走りを見せるようになったのも事実。新型車のGRスープラを投入したトヨタ、FRレイアウトのNSXを投入したホンダを相手に善戦をみせた。

日産系4チームを率いる松村基宏総監督は、20年シーズンの全体を総括して次のように語る。

「私たちの2020年シーズンを振り返ると、だいたい3つのフェーズに分かれています。序盤戦は新しいエンジン制御システムの導入に多少手間取ってしまったところがあり、それによって本来の性能をうまく発揮することができませんでした。しかし3戦目以降の中盤戦では、テクニカルなサーキットではそれなりに速さをお見せすることができたのではないかと思っています。特に第3戦鈴鹿では、予選2番手から優勝することができ、本来の性能を発揮できたと考えています。3戦目以降は色々なものが噛み合ってきて、勝つこともできるようになってきました。ただしシーズン終盤では、タイヤのピックアップにちょっと苦戦してしまいました。ライバルもそうだったと思いますが、いい時と悪い時の差が予想以上に大

日産系チーム総監督
松村基宏

SUPER GT GT300 CLASS CHAMPION INTERVIEW

藤波清斗／ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ

**異例づくしとなった2020年、シーズン中盤は苦しみながらも
第5戦富士、第7戦ツインリンクもてぎで2度の勝利を挙げ
GT300クラスのチャンピオンを獲得したリアライズ 日産自動車大学校 GT-R
ドライバーの藤波清斗とジョアオ・パオロ・デ・オリベイラに話を聞いた**

Text by Soichi Narita Photo by Soichi Narita, NISMO

SAMPLE

コロナウイルス禍での シリーズ開催への感謝

N-BLOOD 編集部（以下NB）：あらためまして、チャンピオン獲得おめでとうございます。

藤波清斗（以下藤波）：まずは、2020年シーズン、このようなコロナウイルス禍でレースの開催ができるか分からないなか、レースができたことに感謝しています。チームとしても参戦2年目で、オリベイラ選手ともチャンピオンを獲りたいねという話をしていたので、うれしいことですし、一生の思い出となるシーズンになったと思います。

ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ（以下JP）：チャンピオンになれたのは最高の気分です。これ以上の幸せはありません。もちろん、2020年は多くのファンがサーキットに来られない厳しい状況でしたが、最後にはたくさんの人がサーキットに来てくれました。今は最高の気分ですが、モータースポーツの世界では過去の栄光に満足して精進を怠るわけにはいきません。常に前進していかなければならないので、これからも歩みを止めずに取り組んでいきたいと思います。

NB：チャンピオンを獲得したという実感は、すぐにありましたか？

藤波：僕はすぐに感じられたわけではなく、ひと晩くらいたってからです。数年前の自分からすれば、まさか自分がチャンピオンになるとは思いませんでしたが、やってきたことは無駄じゃなかったと思えました。

JP：私はチェッカーを受けた瞬間に、勝利の意味、チャンピオンの意味を感じることができました。チームも無線でかなり盛り上がっていました。

NB：2020年シーズンはコロナウイルス禍でなかなか会う機会も少ない状況でしたが、どのようにお互いのコミュニケーションをとっていたのでしょうか？

藤波：オリベイラ選手と初めて会ったのは体制発表会の時でした。テストなどの移動をなるべく一緒にしたり、ミーティングを重ねたりしてコミュニケーションを取りました。とにかく経験豊富で、速いし強い。数年前の自分にとっては雲の上の人という存在でした。優しいし、一緒に戦えたことは自分にとって大きな財産になりましたね。

JP：レース前にはファクトリーでミーティングをしていましたし、レースの合間にもできるだけコミュニケーションをとるようにしていました。私たちはお互いに信頼感をもち、ふたりとも常に自分たちの仕事に集中していました。レースウイークにやるべき仕事をきちんと理解しているので、計画どおりにプランを遂行できることがチームの強みにもなったと思います。

NB：開幕が遅れたシーズンでしたが、それまではどのように過ごしていましたか？

藤波：自粛期間はできるだけ外出をせず、家の中でできるトレーニングをしていました。とにかく開幕に向けて、できる準備はやっていました。

**「このような状況でレースができたことに感謝しています
一生の思い出となるシーズンになりました」**
――藤波清斗

2020年シーズンからチームに加入した藤波清斗。経験豊富なオリベイラとコンビを組むことが自身の財産にもなったと語る。

SAMPLE

JP：自転車ですね。毎日のようにサイクリングをしていました。2020年に入ってからは、生活の大きな部分を占めています。自転車でのトレーニングはこれからも続けていきたいですね。

プレッシャーが掛かるなか 心がけた“いつもどおり”

NB：シーズンを振り返ると、開幕こそいいスタートを切れたと思いますが、その後は少し苦しい戦いになってしまったのではないでしょうか。

JP：自分たちの強みは常に分かっていたので、自信を失うことはありませんでした。ですから第3戦鈴鹿での不運なアクシデントや、第4戦ツインリンクもてぎでのペナルティがあっても心配はなかったです。状況を好転させることができる、それは分かっていました。

藤波：シーズンを通して予選で前の方に行くことはできませんでしたが、ロングランの自信はありましたし、開幕戦で上位に食い込めたことでチャンピオンも狙えると感じました。ただ、勝利まであと一歩というところがなかなか難しくて……。オリベイラ選手と話し合いを重ね、チームからの提案もあり、それらが組み合わさることでチームの雰囲気やクルマの感触が良くなっていったのが、第5戦でした。

NB：第5戦、第7戦で優勝し、最終戦をランキングトップで迎える心境はどうでしたか？

藤波：オリベイラ選手と話していたのが、自分たちのすべてを出し切れば結果はついてくるということ。とにかく“いつもどおりやろう”ということを心がけました。チャンピオン争いをするとどうしても気持ちが入りすぎてしまいますが、いつもと同じことをしようと話して臨みました。

JP：かなりリラックスした気分で、あまりストレスを感じませんでした。自分たちで変えられないこと――つまり他のマシンがどうだとか、誰が何をしているか、ライバルの戦略などを気にするべきではありません。自分たちのレースをして、自分たちのクルマとタイヤにとってベストな戦略を立てればいいんだと考えました。他のマシンがタイヤ無交換作戦などで時間を稼ごうとしていたのに対して、我々は終盤にスピードを出すことができた。最終的に自分たちの強みを活かすことができたのだと思います。

NB：その最終戦では終盤に3位に上がり、チャンピオンが獲得できる順位になりましたが、その後も前を行く65号車を追う手を緩めず、最終的にはオーバーテイクしました。その時の心境を教えてください。

JP：あの状況でチャンピオンになれることは分かっていましたが、僕たちにはスピードがあったので65号車を抜くこともできると思っていました。だからあまりアグレッシブになる必要もなく、ただ安全に追い越すことだけを考えていましたね。頭の中にあったのは、とにかく速く走って、追いついたら追い越すということ。それがポイントだったんです。チャンピオンになるための最善の方法は前に進み続けることだと思うし、コース上で65号車に勝ったことで名実ともにチャンピオンにふさわしいということがはっきりと証明されたと思っています。

SUPER GTで求められる ふたりのコンビネーション

NB：オリベイラ選手から見て、藤波選手はどんなドライバーですか？

JP：はじめは藤波選手のことをよく知らなかったのですが、開幕前のテストでポテンシャルがあると感じました。藤波選手はチームと一緒に仕事をしたいという気持ちが強いですね。SUPER GTはふたりのドライバーが組んで走るので、チームとして仕事をしなければなりませんが、彼はいつも私に協力してくれて、いつもクルマの情報や改善すべきポイントを教えてくれました。もちろん、彼は速くてアグレッシブだし、いつも信

第3戦鈴鹿でのアクシデント、第4戦ツインリンクもてぎではペナルティを科されるなど、苦しいシーズン中盤を経て迎えた、第5戦富士スピードウェイ。予選6番手から、シーズン初勝利を手にした。

SAMPLE